

Ⅰ 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えよ。（配点 75）

「ハヤリとウキタリには似たところがある」といふなら驚かれるだろうか。

さう、ハヤリとウキタリ、つまり流行と慣習は対照的、対立的な文化のあり方だとされている。両者は時間的な持続性の点で大きく異なり、慣習（ウキタリ）が何世代にもわたって継承されてきた行動様式であるのに対して、流行（ハヤリ）は「く短いサイクルでウキタリ消滅するもの」といふのがおそらく一般的な認識であろう。あるいは、慣習は世代間でタテに伝承されるが、流行はヨコに伝播する、と言われることもある。こうした見方は必ずしも間違っているわけではない。しかし、それにもかかわらず、ハヤリとウキタリには共通点があり、それについて考えることは民俗学にとって無意味ではない、と思う。

ハヤリとウキタリの共通点の一つは、どちらも普遍性を欠いた、その意味でローカルで特殊な文化だといえる点である。

ウキタリと流行はどちらもがローカリティと結びついているといふのはあらためて言うまでもないだろう。ウキタリは「○○のウキタリ」といふ表現は、ほとんどの場合、それを保持する集団を特定して言及される。そしてその言い方は、その行動様式が「○○」の外域では通用しないことを牛はがナイという言い方でもよい。日照りに開いた開きを踊るは○○イラのウキタリではあるかもしれないが、隣へうつそうなどは限らない。年取り華ごし大盛りには餅を食べるのは東日本のウキタリであって、関西や中国・九州はそうではない。「日本のウキタリ」はロシア人にもアメリカ先住民にも無縁であるから、彼らは益に帰着しただけ。仕事は真夏でもスーツにネクタイで、という事務系サラリーマンのウキタリは、職業にとつてはまったく無関係である。

ハヤリは、あるいは地域や既存の社会集団を超えて広がるもののように思われているかもしれない。しかし、実態には限られた範囲、たとえば地域・年齢・性別・身分・階層・職業等々によって限定された集団に紐づいた現象であることがほとんどである。「大流行」などと言ってもせいぜい十代後半から二十代前半の男女の一部に支持されただけです。『世界的流行』がしゃべり花道踊りの一役以上の権威をもち階層だけのものではあつたりする。そして、それ以上に重要なのは、「ハヤリ」はけつこつ増殖の入り口とは来道とされていらないという点である。流行の流れたる所にはその

Ⅰ にもあから、ある程度の範囲や範囲を越えては継承している文化要素は、もはや流行とは呼ばれない。ハヤリは、なによりも同時代人という集団のローカルな（正確にはナニナリナ、う言づくめだ）文化なのである。

ハヤリとウキタリのもう一つの共通点は、どちらも民俗学や人類学では説明のでもない行動様式を正當化することである。

日本人の多くは今でも正月に餅を食べる。この行動が民俗学で説明するところはおそろしく困難である。正月に餅を食べるというところは健康にいいといわれているが、この時期、餅以外の食品が手に入らないわけでもない。したがって、もし理由を問われれば、おおかたの人は「（日本の）ウキタリだから」と答えてくるべきでない。もちろん、民俗学者なら属性を白という色、丸という形などから餅の象徴性を説明しようとするだろうが、しかし現実には社会のなかでこの行動様式を保持し、継承をしているのは、ウキタリであること、つまり昔からそうして来たのだ、というたゞ一つの理

由なのである（ちなみに「シタリ」は「仕来り」で、して来たこと、の意味である）。シタリであることは、もわめて合理的で、つまり理屈抜きに、その行動様式が存在理由となる。

なお、二つで少々注意しておかなければならないのは、ある行動様式がシタリとして堅持されている一方で、実際にそれを長い時間を超えて継承されていることは別だということである。たとえば、わたしたちにとって葬式に黒を着用するのは疑いもなくシタリである。しかし実はこれは意外と新しいことだ。戦前の戦場の野辺荒りの写真を見ると、とくに女性たちはみな白無垢の着物は白いかざりものをして加わっている。葬式に黒を着るのはけして日本人が仕来りだったことではなかった。シタリの最たるもののように思われている神理式の神前結婚にしても、十九世紀の末には「ヤウエツ」されたものであって、その後も村落部ではより伝統的な神結婚、つまり神さまを介さない祝言のあげ方が広く続いていた。シタリであることは歴史的な態度を促進するものではない。

さて、同じようなことをハヤリについても言える。流行は、しばしば合理性や合理性と対立する。ときに、流行の外に身をよこせば必ずしも意味があるとは思えない非経済的・非経済的なモノや行動様式がハヤる。多分我々にも言うにしても、多くの選択肢のなかからそれを選ばなければならないのか、合理的な理由がつかないことが少なくない。そして、そういう場合には、その選択を最終的に説明するのは、「ハヤっているから」の一言である。

つまり、シタリもハヤリも、シタリであること、ハヤリであること、そのこと自体で自分自身を正当化する。その正当化の論拠は、要するにそれが誰か——シタリなら過去の先人たちに、ハヤリなら同時代の人たちに——共有されているという点にある。そして、そういう方法で正当化されるしかないのは、結局、その行動様式が合理性や実理性と距離を置いている、言葉で換えては、^E 何らかの合理性をナカボウしているからにはほかならない。ハヤリやシタリが特定の集団に閉じ込められて合理性をもちえないのも、つまりはここに理由がある（合理的・実理的な行動様式は「早晩」ハヤリでもシタリでもなくなる）。

シタリを保持している集団が「ヤエ（家）」とか同族・同村・民族のすべて血縁でつながっていると思われていること、行動様式を共有する先人たちは「先祖」と呼ばれるだろう。会社や学校やクラブなら「先輩」である。シタリは、先祖や先輩たち以来の集団独自の約束事として、歴史的・持続的な集団の「ヤエ・ハヤリ・タイ」と結びつけられやすい。ハヤリは、模倣する相手を先祖や先輩から同時代の他者に置き換えることによつて別の行動様式を保持せられ、それゆえに、あるときにはシタリに急激に置き換わる集団の解散と消滅だ、また維持すべき集団の「ヤエ・ハヤリ・タイ」の崩壊にこそなると危惧される。

文化は **Ⅱ** の体系である。ハヤリやシタリという文化のあり方は、そのことを端的にわからせてくれる。

（不働僧曰「流行りと仕来り」）

問 1 傍線部 a・e のカタカナを漢字に直せ。カタカナの後に示した選招肢のうちから、最も適当なものをそれぞれ一つずつ選べ。ただし、a・e それぞれについて完全しなければ加点しない。
 群言會言 1 1 10。

a ヤイヤイ

ヤイ ① 静 ② 精 ③ 性 ④ 生 ⑤ 制 ⑥ 成 ⑦ 製 ⑧ 盛 ⑨ 勢

1

ヤイ ① 正 ② 整 ③ 成 ④ 制 ⑤ 製 ⑥ 勢 ⑦ 生 ⑧ 精 ⑨ 請

2

b ガンイ

ガン ① 元 ② 願 ③ 眼 ④ 玩 ⑤ 含 ⑥ 頑 ⑦ 丸 ⑧ 販 ⑨ 巖

3

イ ① 以 ② 厝 ③ 意 ④ 異 ⑤ 井 ⑥ 位 ⑦ 易 ⑧ 依 ⑨ 委

4

c ソウシン

ソウ ① 蔵 ② 贈 ③ 送 ④ 増 ⑤ 確 ⑥ 臓 ⑦ 敷 ⑧ 相 ⑨ 留

5

シン ① 心 ② 新 ③ 真 ④ 伸 ⑤ 毀 ⑥ 浸 ⑦ 信 ⑧ 進 ⑨ 振

6

d ソウシミン

ソウ ① 及 ② 相 ③ 總 ④ 想 ⑤ 銅 ⑥ 装 ⑦ 送 ⑧ 走 ⑨ 爭

7

シミン ① 出 ② 卒 ③ 送 ④ 術 ⑤ 竣 ⑥ 隣 ⑦ 旬 ⑧ 充 ⑨ 貢

8

e ナイホウ

ナイ ① 亡 ② 無 ③ 稍 ④ 成 ⑤ 内 ⑥ 那 ⑦ 何 ⑧ 難 ⑨ 歎

9

ホウ ① 腕 ② 輩 ③ 法 ④ 抱 ⑤ 訪 ⑥ 傲 ⑦ 保 ⑧ 包 ⑨ 封

10

問 2 傍線部 A「早晩」、傍線部 Y「端的に」の本文の意味として最も適切なものを、次の①～

⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は ・ 。

A 早晩

- ① 早い遅いにかかわらず
- ② だらだらとつづいて
- ③ たゞを連ねる期間になっても
- ④ 早い遅いを無視して
- ⑤ きわめて早い期間に

Y 端的に

- ① 徹底的に羅列し
- ② 部分的に羅列して
- ③ 論理的にもつちりと
- ④ 明白にやはりと
- ⑤ 結論づけを強く

問 3 空欄 ・ に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちか

らそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は ・ 。

I

- ① 地域性 ② 階層性 ③ 新奇性 ④ 時間性 ⑤ 限定性

II

- ① 象徴 ② アイデンティティ ③ 模倣 ④ 約束 ⑤ 正統化

問 4 傍線部 A「流行はヨロに伝播する」の「ヨロ」の具体的な指し代等として最も適切なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 同じ時代を生きている人びと
- ② 行動様式を模倣しようとする人びと
- ③ 同じ階層に属している人びと
- ④ 親しくつきあっている人びと
- ⑤ 同じ地域に住んでいる人びと

問 5 傍線部 B「へやりはけつして過去の人びとは未だおぼえていない」に見られるへやりの特徴の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答書は 16。

- ① 地域や重臣の社会集団を超えて広がり、多くのへんに共有される文化的要素である。
- ② 実際には地域・年齢・階層・職業等々によって限定された集団内部の現象である。
- ③ 過去の古びかしいものではなく、最先端の新しいものを求め続ける未来志向である。
- ④ 実利性や合理性で説明できない行動様式を、改進黨的に正当化して共有させてしまう。
- ⑤ 時間の流れの中で一時的に共有されるにすぎないという意識でのローカリティを有する。

問 6 傍線部 C「歴史的な経歴」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答書は 17。

- ① 歴史的根拠がすべてに明確であるという点
- ② 歴史的価値を深く理解されているという点
- ③ 歴史的に今後も長く残っていくという点
- ④ 歴史的に正しく行なわれているという点
- ⑤ 歴史的正当性が備わっているという点

問 7 傍線部 D「そのこと自体で自分自身を正当化する」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答書は 18。

- ① シキタリやへやりは、特定の集団の人びとに対してだけ、その行動様式の正当性を主張して押しつけるという点
- ② シキタリやへやりは、シキタリだからへやりだからという理由だけで、その行動様式を説明していくという点
- ③ シキタリやへやりは、実利性や合理性を持ち出して、その行動様式の正当性を説明するといっている
- ④ シキタリやへやりは、むしろ理由がないという点にほめて、私どものアイデンティティを保護していくという点
- ⑤ シキタリやへやりは、その行動様式を共有しないべからざる非難する点において自分勝手な点にあるという点

問 8 傍線部 E「何らかの恣意性」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **19**。

- ① 美利性や合理性を無視できるので、私たちが好きなように選択できるというふう
- ② 美利性や合理性と無関係なので、やとんだまことかげり消滅してしまふというふう
- ③ 美利性や合理性に縛られていないので、集団内部の合意を強硬に強行してはけるというふう
- ④ 美利性や合理性に縛られていないので、どのような行動様式であってもよいというふう
- ⑤ 美利性や合理性と明らかに矛盾する場合には、あえて従わなくてもよいというふう

問 9 傍線部 F「維持すべき集団のアイデンティティの崩壊」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **20**。

- ① 集団が先人からのレガシーを失って、あるべき行動の基準を見失うこと
- ② 集団が求心力を失い、個人が集団を離れてバラバラになってしまうこと
- ③ 集団が、集団としての活力を失いに失って、やがて消滅するということ
- ④ 集団がまともさを失い、人々の合理的な抱り所として機能しなくなるということ
- ⑤ 集団がレガシーによって定められた行動様式を失い、バラバラに選ばれること

II 水の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えよ。(配点 75)

古代ギリシア初期の宇宙観

紀元前五世紀のピタゴラス学派は、宇宙の秩序を数学的な原理を基にして確立しようとした。例えば、宇宙の形や運動は完全な図形である円や球の組み合わせとしたことがその典型である。そして早くも紀元前四〇〇年頃には、地球を中心として月・太陽・惑星・星のキョウカク^aが取り巻く、各天体はその上を等速で円運動するという「天動説宇宙」が提議されていた。また、天体は(地球も)球形であり、円運動を行なうという考えから月食(月が地球の影に入るとする)や月の満ち欠け(丸い月の方向による見え方の差として)を説明した。神に頼る部分を小さくして、物体の通常の運動として理解しようとしたのである。

天動説宇宙は、プラトンを経てアリストテレス(紀元前三八四年～前三二三二年)によって物質の物理的機構と結び付けられて完成した。彼は、月より下の世界は火・空気・水・土の四元素から成っており、有稜形等の直線運動(上昇か下降のみ)をするのに対し、月より上の天上界は滑らかな元素であるエーテルでできている、水久不滅の円運動をしているとした。更に雇いし宇宙体系であり、物質(元素)の固有の性質として天の運動を解釈し神の関与を不要としたのである。この天動説宇宙はクラテアウス・アトレマイオス(通称トレミー、九〇年頃～一六八年頃)の修正を経て、その後一四〇〇年もの間、人々の宇宙観を支配し続けた。太陽が東から昇り西に沈む運動を行なっているという、私たちの直観と一致していたためだろう。

他方、ギリシア時代においては「異端の説」も許容されていたことを付け加えておきたい。サモスのアリストタルス(紀元前三一〇年～前二三〇年頃)は、太陽が宇宙の中心にあつて地球はその周りを公転する「地動説宇宙」を提唱した。彼は、半月のときの月と太陽の間の角度を測つて、地球から太陽までの距離が月までの距離の約二〇倍であることを示し、見かけ上同じ大きさ(視角)に見える月と太陽の実際の大きさを一対二〇と推定したのである。また月食時の地球の影の大きさが月の三倍であることから、月と地球の相対的大きさを一対三とした。それらを組み合わせると、月と地球と太陽の大きさの比は一対三対二〇になる。であるなら、一番巨大な太陽が宇宙の中心であるべき主張したのである。観測の精度が悪いためその数値は間違っていたが、論理構成に堪えるとはない。幾何学的な発想を天にまで適用した宇宙構造論で、客観世界の認識法に關して

A

やはり紀元前四〇〇年頃のデモクリトス(紀元前四六〇年～前三七〇年)は、物質を細分化していくともうこれは太陽でさえも最小単位(アトム、原子)があり、地球や惑星や太陽もアトムからできているとした。この説から必然的にアトムとアトムの間の空間は真空であることが導かれる。この理論は「自然は真空を嫌う」としたアリストテレスの二一世紀とは対立するものであった。これは直接に宇宙観の争いではないようだが、月下界と天上界を区別せずに物質の 甲 を主張したことに意味がある。天上界の異質性を認めず、地上と同じであるとして天を地に引き寄せたからだ。天も通常の物質世界である、と。物質論から天の神格性を引き剥がしたと言つてきだろうか。

アレキサンドリアの学芸館

紀元前二〇〇年頃、アレキサンドリアの中心はナイル川河口のアレキサンドリアに移っていた。プトレマイオス王朝の庇護の下に、図書館と博物館を兼ねた学芸研究施設のアセイオンが造られ、そこにアリストアルコスやアルクメデスら、ギリシャの俊才たちが数多く集まってきたからだ。学問を進めるためには、それなりの予算と施設が必要であることがわかる。

ギリシャ人は既に地球は球形であることを知っていた。**I**、その大きさを測ることができたのではないが、そう考えたのがエラトステネス（紀元前二七六年―前一九五年頃）であった。ナイル川の上流のシエネとは夏至の正午に太陽が井戸の底を照らす（つまり真上に来る）ことを知った彼は、シエネから五〇〇〇スタジア（古代ギリシャの距離の単位で約七九〇キロメートル）だけ真北にあるアレキサンドリアで地上に垂直に立てた棒（グーゼン）の影の長さを測り、それから地球の大きさを計算したのである。天の配位を利用して地の測定を行なった工夫であった。これは実に巧妙な方法で、現代の正確な値にひけをとらない。自分の立ち位置を明らかにするために天の神すらも使いなさなくてはならぬわけだ。

ヒッパルコス^①は、天文学の「カイソ」と呼ぶにふさわしい。彼は、惑星の運動を説明するためにアポロニウスによつて考案された離心円（惑星の明るさが変化する）とから、地球は円の中心から少し離れた点にあるとする。そして離心円と固転円の組み合わせ（惑星は固転円上を等速円運動しつつ、その円の中心は離心円上を等速円運動する）の精度を高めるりふから出発した。やがて、太陽の軌道が円からずれていく割合を決定して肉眼で確認できる限度一杯の大惑星行表を作成したのである。地上の二ヶ所から月の中心部を見た角度の差（視差）から月までの距離が地球の半径の五九倍（正しくは六〇倍）であると算定できた。また、一〇〇〇個余りの星の位置と明るさをまとめた星表（カタログ）を作ったが、これは近世まで使われ、星表の嚆矢となった。**II**、エジプト時代から蓄積されていたデータから春分点が毎年後退していくことに気づき、天の北極が動いていること、つまり地球の歳差運動を発見したのである。ヒッパルコスは、いわば天が提示している運動を読み解く**2**であったと言えよう。そこには神の概念はなく、ただ古代エジプト以来膨大に集積された観測事実があり、それをキョウイン^②に整理に挑戦したのである。

その意味で、ヒッパルコスは天文学者であり、宇宙の構造をあれこれ論じる宇宙論者ではなかった。実際、彼はアプステレスの天動説宇宙を疑うことなを怠り、前記のように、現実と合うよう**3**。通常科学に徹して改良主義の道を選んだのだ。ヒッパルコスの名聲もあってアリストアルコスの地動説宇宙は顧みられなくなつてしまつたと言われている。

他方、ヒッパルコスは世界地図を作成していたことは興味深い。徹底した**IV**、主義者であつた彼は、各星から定えられる緯路を基にして観測も含めた世界の有り様を描いたのである。地中海世界は詳しく、遠くのエントやアフリテンは大まかで、当時の地理的情報がどこまで及んでいたかが推定できる。

アンティキテラの機械

以上のように、古代ギリシャの天文学は理論が中心で、^③神に頼らないうちから自分たちの想像に天の運動を合わせようとするものもあつた。**III**、近年になって技術と結び付いた天文

学も行なわれていたらしいことがわかってきた。「アノテイクテラの機械」と呼ばれる、惑星現象や日月食を予報する古代の装置が見つかったのである。

一九〇一年にギリシアのアノテイクテラ島沖の難破船から骨彫家の館里基盤が引き揚げられ、一層に見出された陶器^①やコインから紀元前一五〇年～一〇〇年頃のものでとれた。一九五〇年代から詳しく調べられ、この遺物は太陽・月の暦や運動、日月食の予報をするための一種のアナログコンピュータではないかと推測されるようになった。しかし、技術の不足もあって、その構造の詳細の解明にまで至らなかったのである。

新たに開発されたCTスキャン技術を駆使した結果が二〇〇六年と〇八年に発表され、大きく注目されることになった。この機械には、少なくとも三七個のギア（歯車）の複雑な組み合わせがあり、一〇〇〇文字近くの天文学に関連するギリシア語の単語（^②使用法^③）が書かれていたらしい。入っていた箱の前面には天文現象を示す視数のダイヤルがあり、クランクで日付を入力すると、前面は太陽年の日付・月と太陽の位置・月のイソウの表示盤となっており、背面のらせん状機構を用いた二個の表示盤（^④メーソス^⑤とサロス^⑥周期）で日月食の予測計算ができたらしい。実に巧みな天体運動の機構機械で、ギリシア時代に既に工学技術が発達していたことがうかがえる。

天の運動を地上に再現する試みであつたのかもしれない。ギリシア時代にもしたたかな技術者がいて、天を模倣する^⑦ということその才能を注ぎ込んだのではないだろうか。そうであるなら、^⑧至簡^⑨の天であつても手中に収め得たという自信に携^⑩わ^⑪れていたら推測されるのだが、いかがだろうか。

（池田丁「字語通と神」）

問1 傍線部 a、e のカタカナを漢字に直せ。カタカナの後に示した選択肢のうちから、最も適当なものを選び、それぞれ一つずつ選べ。ただし、a、e それぞれについて答終しなければ加点はしない。解答書は [21]、[30]。

a キエウカク

キエウ ①旧 ②求 ③究 ④忌 ⑤級 ⑥救 ⑦球 ⑧給 ⑨窮

21

カク ①角 ②格 ③殺 ④覚 ⑤較 ⑥隔 ⑦閑 ⑧確 ⑨獲

22

b カイン

カイ ①回 ②戒 ③改 ④拐 ⑤界 ⑥闊 ⑦階 ⑧解 ⑨懐

23

ン ①祖 ②粗 ③菜 ④推 ⑤組 ⑥疎 ⑦訴 ⑧壘 ⑨礎

24

c キョニン

キョ ①巨 ②去 ③店 ④拒 ⑤塊 ⑥挙 ⑦産 ⑧許 ⑨距

25

ニン ①心 ②身 ③信 ④神 ⑤振 ⑥冥 ⑦深 ⑧進 ⑨墳

26

d イ、エ、オ

イ ①以 ②位 ③依 ④威 ⑤異 ⑥移 ⑦意 ⑧繼 ⑨終

27

ウ ①争 ②壮 ③奏 ④相 ⑤理 ⑥坤 ⑦傾 ⑧想 ⑨操

28

e シ、ス

シ ①支 ②仕 ③示 ④至 ⑤志 ⑥施 ⑦試 ⑧資 ⑨諮

29

サ ①左 ②佐 ③作 ④査 ⑤茶 ⑥唆 ⑦差 ⑧許 ⑨鎖

30

問 2 空欄 I、II、III に入る語として最も適当なものを選び、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。また、定数しなれば加えない。空欄 I の解答番号は 31、空欄 II の解答番号は 32、空欄 III の解答番号は 33。

- ① むしろ ② なぜなら ③ あるいは ④ だええは ⑤ しかし
⑥ かりに ⑦ つまり ⑧ ならば ⑨ せらに

問 3 空欄 甲、乙、丙 に入る語として最も適当なものを選び、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 34、35、36。

甲 ① 絶対性 ② 相対性 ③ 普遍性 ④ 個別性 ⑤ 純粋性 34

乙 ① 暴君 ② 結句 ③ 侍従 ④ 執事 ⑤ 達人 35

丙 ① エーテル ② アトム ③ ギリシヤ ④ アーク ⑤ アナログ 36

問 4 空欄 ア に入る文として最も適当なものを選び、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 神の存在を確信したのだ
② 神の助力を客観したのだ
③ 神の介入を排除したのだ
④ 人の信念を導入したのだ
⑤ 人の精神を監視したのだ
⑥ 人の直感を優先したのだ

問 5 空欄 ① にふさわしい最も適切なものを、次の①～⑥のうちから、
一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 意図的に誤差を認めたのである
- ② 不用意に条件を定めたのである
- ③ 図らずも例外を設けたのである
- ④ やむなく計画を試みたのである
- ⑤ 徹底して修正を加えたのである
- ⑥ 大胆にも原則を捨てたのである

問 6 傍線部 A「神に傾き神を小さくして」の説明として最も適切なものを、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。解答番号は 39。

- ① 神が信仰の中心であることの信念に疑問を抱いて
- ② 神が宇宙の支配者であることの伝説に非難を加えて
- ③ 神が秩序の根拠であることの立場に配慮を保って
- ④ 神が原理の本質であることの解釈に距離を置いて
- ⑤ 神が運動の法則であることの提議に賛意を示して
- ⑥ 神が天体の母であることの推測に確信を持って

問 7 傍線部 B「世に顧らざるところか自分たちの思念に天の運動を合わせようとする者らも

あつた」の基幹として最も妥当なものを、次の①～⑥のうちから、二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 40・41。

- ① 半月のときの月と太陽の間の角度を測って月と太陽の大きさの比を推定し、また、月長時の地球の影の大きさから月と地球の大きさの比を算出し、その結果、月と地球と太陽の大きさの比を特定して、一番巨大な太陽が宇宙の中心にあるべきことを主張したという。
- ② ナイル川の上流のシエネでは夏至の正午に太陽が井戸の底を照らすことを知って、シエネから五〇〇スタジアだけ真北にあるアレキサンドリアで地上に垂直に立てたノースへの影の長さを測り、それから地球の大きさを計測したという。
- ③ アポロニウスによって導入された離心円および等円・偏心円の組み合わせの精度を高めることにより、惑星の運動を説明しようとしたという。
- ④ 地上の二箇所から月の中心部を見た角度の差から月までの距離が地球の半径の五九倍であることが決定したという。
- ⑤ 一〇〇圓余りの星の位置と明るさをまとめた星表を作成したという。
- ⑥ 自分が毎年後退していくことに気づき、天の各星が動いていることを発見したという。

問 8 傍線部 C「至高の天であっても手中に取め得る」の説明として最も妥当なものを、次の①～⑥のうちから、二つ選べ。解答番号は 42。

- ① どの上もなく無い夜空でも、星に手が届くような感覚を味わうことはできる。
- ② 深遠な神の意図は予測不能でも、願いはかなうと信じられることはできる。
- ③ 限りなく広がる宇宙でも、惑星運動の持続性は証明できる。
- ④ 神意に満ちた宇宙でも、天文学の理論を用いれば惑星を説明できる。
- ⑤ 複雑な構造に支配されている天界でも、天文現象は継続的に再現できる。
- ⑥ ところどころ闇が不明な時空でも、工学技術は問題を解決できる。

問 9 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑨のうちから、二つ選べ。ただし、解答の順序は問わないが、完全しなれば加点しない。解答番号は 43 ・ 44 。

- ① 古代ギリシアでは、ピタゴラス学派が完全な幾何学図形である円や球の組み合わせで宇宙秩序を説明しようとする考え方を成立させ、やがて地球を中心として人間を天体が等速円運動する天動説宇宙が提案される。月の満ち欠けや食も物理現象として解釈されるようになった。
- ② 月下界は有限寿命の恒星運動をし、天上界は永久不滅の円運動をしているという天動説宇宙はアリストテレスによって完成され、おそらく人々の直感と一致していたため、プトレマイオスの修正を経て以降、基本的宇宙観として長期間定着した。
- ③ アリスタルコスの地動説宇宙は、月と地球と太陽の相対的な大きさを観察と計測により特定した幾何学的な発想に基づく宇宙構造論であり、数値計算の誤りから異端視されたが、客観的な認識法を示すものとして評価された。
- ④ 物質の最小単位の原子を主体にも当てはめたデモクリトスの理論は、アリストテレスの麗しい宇宙体系と矛盾したが、宇宙も通常の物質世界と同様であるとの考えに基かれており、神の関与を不要とする宇宙観の一面を伝えている。
- ⑤ プトレマイオス王朝時代にアレキサンドリアが宇宙観を発展させる基点となったのは、学術探究施設の建設に負うところが大きく、そのことは、学問の進歩は成果の存在だけでなく、予算と施設の実現にも大きく依存するということを示している。
- ⑥ 地球が球形であることを知っていたエラトステネスは、緯度の異なる二地点でノースンの影の長さを測定し、二地点間の距離との関係から地球の大きさを正確に計算しているが、そこには天の神への篤い信仰が認められる。
- ⑦ ヒッパルコスは観測も含めて世界地図を作成したが、地中海世界の記述については比較的正确であり、それは当時、遠隔地のインドやアフリカの地理的情報の入手が難しかったことを物語っている。
- ⑧ 古代ギリシアの天文学は観測を中心に発展し、技術と結び付いた成果は十分解明されてこなかったが、近年、アンティキテラ島沖の難破船から引き揚げられた機械によって、天体の運動や日月食を手算する技術が相当発達していたと推測されるようになった。
- ⑨ アンティキテラの機械には、多くの歯車の組み合わせによる複雑な機械と天文用語の記述が確認されたため、その装置は現在、ギリシア時代の有能な技術員が天文院の再現を意図した遺例であると解釈されている。